

資料紹介

# 郵政博物館の切手類資料の存在

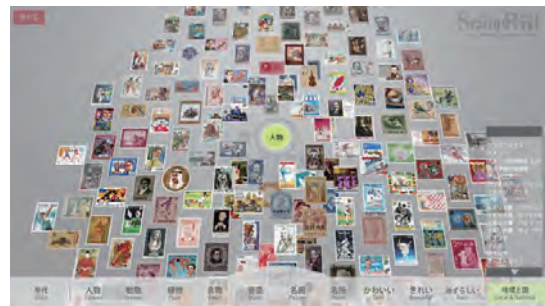
## —「高松塚古墳保存寄附金つき郵便切手」の製作資料を例に—

井村 恵美

### はじめに

郵政博物館の約198万点のコレクションで最も多いのが「切手」である。

日本で発行される切手は、1871（明治4）年の竜文切手から現在の切手までを体系的に保管している。万国郵便連合<sup>(1)</sup>から送付される外国切手についても保存管理を行い、一部は1902（明治35）年の開館当初から展示に供され、現在では当館の顔ともいえる約33万種類の切手コレクションとして常時公開するまでとなっている。切手類の作品調書は、データベースで管理しており、展示場の検索システム【図1】などに活用されている。



【図1】 郵政博物館の切手検索器機「スタンプポンド」、2014年、フォーワードストローク撮影

一方で、切手の製作過程に関する基礎資料を含む「郵便切手類の部」（以下、「切手類資料」）【表1】は、これまで体系的な調査が行われず、整理作業はほぼ手付かずであった<sup>(2)</sup>。

そこで近年、切手原画のほか試作図案、試刷、素材写真などについて、切手の製作経緯を知る重要な資料と位置づけ、調査・分類を開始している。これら切手類資料の先行研究としては、閲覧により調査を行っている星名定雄氏<sup>(3)</sup>が、記念切手原画と下図類2,625点の比較研究を著書により明らかにしており、現在も未分類の図案を中心に調査研究を続けている。

そんな中、筆者が調査を行っていた1950年から70年代の未整理の切手類資料から、1973（昭

1 万国郵便連合（仏：Union postale universelle、英：Universal Postal Union、略称UPU）。1874年10月9日に設立された世界で2番目に古い郵便の国際機関。加盟国の切手が博物館で保管されるようになったきっかけは、1899年、逓信省郵務局外国郵便課から計理課物品掛に移管されたことに始まる（博物館の前身である参考品室に陳列）。以来保管され現在に至る。（逓信博物館編『逓信博物館75年史』信友社、1977年、11-12頁）。

現在は連合を通じて年6回に分けて（年総数約4,000点）送付された各国の切手を、日本郵便株式会社が受領し、郵政博物館を運営する日本郵政株式会社に長期貸与手続が行われ、当館で保管している。

2 「一般資料・郵便切手類の部」中、5001、5031、5081、5300、5400（5401）、5800は、整理番号の付記、データベースへの登録が終了している。

3 郵便史研究会副会長。イギリス郵便史研究家であり、近年は日本切手の原画と下図の関係について調査を行っている。『昭和記念切手図録』（鳴美、2022年）では、郵政博物館収蔵資料のうち、1922年から1998年までの切手原画約1,600点、未整理だった1937年から2010年までの下図類約5,700点の調査を行い、その中からデータについて取りまとめた1926～86年の記念切手原画、下図、2,625点が収録されている。

No.	資料項目		分類番号	種別	整理番号	品名
1	郵便切手資料	日本切手	受入順 7桁の 通番	普通切手	種類別4桁 の通番	普通
				記念切手	同上	記念
				特殊切手	同上	特殊
				(記念切手以外)	同上	年賀
				年賀切手	同上	ふるさと
				ふるさと切手	同上	その他
				その他の切手(軍事切手占 領軍切手等)	同上	その他
2		外国切手 (UPU送付分)	3桁の 国番号	外国切手	種類別4桁 の通番	国名
3	一般資料	郵便切手類の部	5000	郵便切手類図案原画類	5001	郵便切手類図案原画
					5031	記念絵葉書原画
					5051	郵便切手類施策図案
					5071	郵便切手図案募集作品
					5081	郵便切手類原版
			5100	郵便切手帖類	5101	献上郵便切手類帖(控)
					5111	郵便切手沿革帖
					5131	郵便切手類はり込み帖
			5200	外国郵便切手類はり込み帖 類	5201	外国郵便切手類はり込 み帖
			5300	実郵便(エンタイア)類	5301	郵便消印帖
					5311	エンタイア(日本)
					5331	エンタイア(外国)
			5400	郵便切手意匠関係文書綴類 (模造切手、収入印紙他)	5401	郵便切手・通信日付印 意匠関係文書綴
			5500	国際郵便切手記念章類	5001	国際郵便切手記念章
					5551	東京国際切手展資料
			5600	切手・はがき類参考品	5601	切手・はがき類参考品
			5700	郵便切手類試刷品	5701	郵便切手類試刷品
5800	日本はがき類	5800	普通はがき、年賀はが き、暑中見舞はがき、 エコーはがき、郵便書 簡等			
5900	外国はがき	5900	国別、種類別など			

▲ [表1] 郵便切手および郵便切手類資料(郵政博物館分類項目より抜粋)

和48)年発行の記念切手「高松塚古墳保存寄附金つき切手」(以下、「高松塚切手」)の製作資料を発見し、今年度、飛鳥資料館で開催された壁画発見50周年記念の特別展<sup>(4)</sup>で初公開される機会を得た。

本稿では、高松塚切手資料を解説する前に、当館の切手類資料というコレクションを明らかにするため、まず当館と切手製作の関係性を振り返りつつ、収集された経緯や背景について分

4 高松塚古墳壁画発見50周年・奈良文化財研究所70周年 令和4年度秋期特別展「飛鳥美人 高松塚古墳の魅力」、会期：2022年10月21日～12月18日、主催：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館。

析する。最後に高松塚切手の基礎資料から見えてきた製作経緯を紐解くことを検証例として、今後の分類調査、公開の意義について検討したい。

## 1 博物館と切手製作

### (1) 本省併設時代（郵便博物館、逓信博物館）

〔表2〕のとおり、郵便創業時の竜文切手は、図案作成と印刷を併せて、民間企業である玄々堂<sup>(5)</sup>が担当し、逓信省が発足するまでは印刷を管轄した紙幣寮（後の印刷局）が図案も担当し

年	月	本省が担当した時期	博物館ほかの機関が担当した時期
1870	明治3	大蔵省出納寮が監修（図案意匠、印刷まで玄々堂）	民間企業が担当（玄々堂）
1872	明治5	8	大蔵省紙幣寮が監修（紙幣寮が全行程担当。のちの印刷局）
			大蔵省紙幣寮
1885	明治18	12	逓信省発足
1888	明治21	3	逓信省内で図案意匠を印刷局へ一任することについて議論され、3月から25銭、1円切手の図案意匠の作成に参加。
1892	明治25	7	逓信省「郵務局計理課物品掛」設置。事務に「郵便切手の改良に関する事項」が加わる。郵便博物館設立とともに業務を継承。
1899	明治32	5	
1902	明治35	6	→
1910	明治43	5	
1922	大正11	3	
1927	昭和2	1	「周知宣伝係」設置
1935	昭和10	6	
1944	昭和19	10	「郵務局総務課」設置。「周知係」は博物館から本省へ。
1949	昭和24	6	郵政省発足「郵務局切手課切手室」設置
2001	平成13	1	郵政事業庁発足「郵務部営業課切手葉書係」
2003	平成15	4	日本郵政公社発足「郵便事業本部営業企画部マーケティング担当」
2007	平成19	10	郵便事業会社発足「国内営業統括本部郵便事業本部切手・葉書部」
2012	平成24	10	日本郵便株式会社発足（現在は、「郵便・物流事業企画部切手・葉書室」）

▲〔表2〕切手図案の製作担当部署に関する変遷

た。通信省発足後は、これまで印刷局に任せていた図案を本省で担当すべきという動きがあり、1888（明治21）年になると、25銭と1円切手の図案作成に関わるようになる。

1892（明治25）年には、通信省内に郵務局会計課物品掛が設置され、事務に「郵便切手の改良に関する事項」が加えられた。樋畑雪湖が掛長となり、同課が資料の収集や用品開発、切手等の図案の製作を担当する専門部署になっていく。

その後、この物品掛の機能が継承され、設置された郵便博物館が、切手図案の製作現場になった。従って、設立当初の郵便博物館は、展示よりも用品研究や切手の改良が主たる業務というところから始まったのである<sup>(6)</sup>。

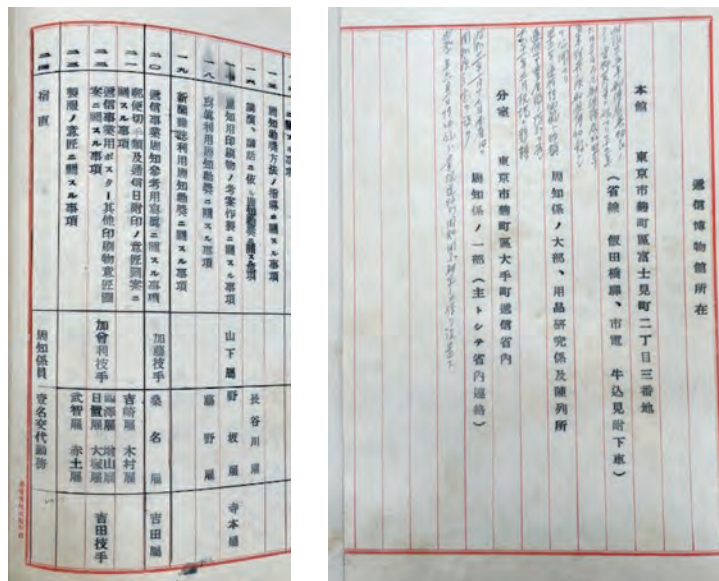
1910（明治43）年、博物館が本省に併設されていた時代【図2】の切手類資料は少ないものの、樋畑雪湖が切手類の図案製作に携わっていたため、富士鹿切手<sup>(7)</sup>などの原画類が少量だが保管されている。



【図2】「通信省庁舎正面」1910年6月竣工（ACA-0035）

## (2) 独立館の飯田橋時代（逓信博物館）

当館120年余<sup>(8)</sup>の中で、切手製作の現場として規模が拡大したのは飯田橋時代である。1927（昭和2）年1月17日に本省に周知宣伝係が設置され、その後1935（昭和10）年6月1日からは、博物館に周知係と用品研究係の2係が設置されることとなった【図3・4】。



【図3・4】「(控)昭和11年7月逓信博物館の現況」フラットファイル保管、1936年（番号未登録）

- 銅版印刷を得意とした2代目玄々堂・松田敦朝（1837-1903）は明治新政府の依頼を受け、民部省札、太政官札の彫刻・製造を担当し、1870年政府より発注された国内初の切手製造も玄々堂の工房が担当した。（郵政省編『郵政百年史』吉川弘文館、1971年、67頁）。
- 逓信省編『逓信事業史 第一巻』財団法人逓信協会、1940年、697-698頁。
- 1922年1月1日、外国郵便料金の改定に併せて新たに発行された。富士山と鹿を配したデザインは3種とも同一でUPUの規程色3種で構成されている。
- 万国郵便連合加盟25周年記念事業の一環として1902年に郵便博物館が開館した。120年の間に数度の移転と改称が行われたが収蔵資料の基本は変わらず現在に至る。（前掲、『逓信博物館75年史』383-386頁）。

そのためこの時期は図案部員<sup>(9)</sup>のスケッチや素材写真、検討図案などの製作過程を知る基礎資料が多く引き継がれている。

ただしこれら図案等に関する切手類資料（5000番台）には大分類項目の分類番号が設定されたのみであり、個体番号（整理番号）を付記する作業などは、切手そのものの整理に対して優先されてこなかった。例えば、「大禮記念繪葉書」<sup>(10)</sup>の製作過程に関する資料【図5・6】が収蔵されているが、展示<sup>(11)</sup>される機会があったが、詳細な比較検証などは行われていないため、今後、製作経緯を解明できる要素が多い資料群の一つである。



【図5】「記念切手類意匠資料（大禮記念編）」のたとう校了紙と宮内省からと思われる指示が書き込まれた結城素明の下絵。

【図6】和綴製本の22版の試刷見本帳。（いずれも番号未登録）

図案部員には、通信博物館2階奥の事務室15坪、製図室35坪、合計50坪のスペースが割り当てられており【図7・8】、切手類だけではなく、各種スタンプや周知用ポスター、図表等に関する意匠図案全般を担当していた。

当時の図案部のようすは、木村勝【図9】技芸官の『郵趣』<sup>(12)</sup>の連載に詳しい。木村の手記によれば、「1928（昭和3）年2月20日、通信博物館雇を命ず、日給1円80銭を給す」という辞令を手に博物館2階の図案部に案内され、1階の事務室とは異なる絵の具の香り漂うような雰囲気居心地の良さを感じたという。

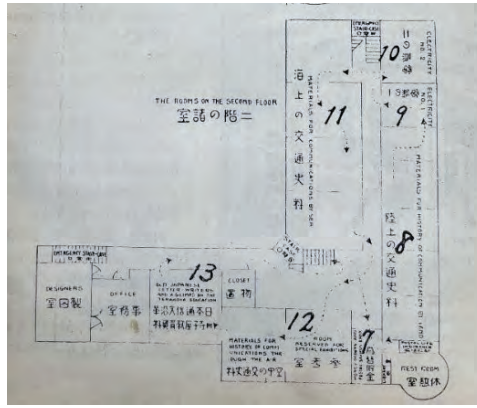
飯田橋時代の切手類資料の保管が少ない理由として、一つには当時の記念切手の発行は少なかったため、図案作成自体が少量であること、さらに1923（大正12）年の関東大震災で本省資料が焼失したことも要因と考えられる。博物館は震災の前年、飯田橋に移転しており被害を免れたが、本省保管の文書や写真、その他関連物品はこのとき失われた。樋畑雪湖の手記にも20

9 現在、切手製作を担当する部署は、日本郵便株式会社本社郵便物流企画部切手・葉書室であり、切手デザイナーが図案を担当している。戦前期は通信博物館の図案部で企画立案や図案作成を担った。かつては技芸官（図案部員は委嘱）と呼ばれた。

10 1928年11月10日昭和の大礼に際して製作された通信省絵はがき。意匠は大嘗祭後に行われた「五節の舞」。木版22度刷りで製作された。原画は日本画家結城素明（1875-1957）が担当した。

11 当該資料を近年公開した事例としては「日本国際切手展2021（PHILANIPPON2021）」（会期：2021年8月25日～30日、会場：パシフィコ横浜）の「コートオブオナー皇室展示」への出品が挙げられる。

12 木村勝「新連載 切手画家のたわごと(1)―通信博物館にはいった当時の思い出―」『郵趣』6月号、1970年、346頁。



左から【図7】「通信博物館」1922年（WAA-0018）、【図8】通信博物館2階の諸室平面図「通信博物館案内」1922年（8802-1295）、【図9】通信博物館の製図室で作業する木村勝技芸官。昭和初期（『郵趣』1970年、346頁）。

冊程度の外国切手の切手帖（駅通寮時代からの外国郵便課資料）が焼失<sup>(13)</sup>とあることから、切手改良に関するさらに多くの資料が存在していた可能性がある。

### (3) 本省製作時代と博物館の収集方法

1944（昭和19）年10月、博物館を所管していた通信院の分掌規程改正のため、博物館に設置されていた3係は廃止され、図案部の機能は本省郵務局総務課に管理替えとなった<sup>(14)</sup>。これ以降、戦後の郵政省から現在の日本郵便株式会社まで、切手製作は本社が担当している。

従って、1944（昭和19）年以降の原画等の切手類資料は、自動的に保管されたものではなく、博物館が折に触れて本省に掛け合い、収集を続けていたことがうかがえる。

切手類資料の種類・量ともに豊富なのは1950年代から70年代であり、検討資料（写真）、試刷、施策図案、原画類など多岐に渡る。切手原画は過去にまとまった移管が行われ、1999（平成11）年ごろまでを収蔵しているが、2007（平成19）年10月1日郵政民分化の影響もあり、基礎資料の収集は困難となっている。

そんな中、現在、試刷、試作図案などを優先して整理番号の付記や調書の作成などを進めている。製作に関係する写真類は、ネガ・ポジのままや紙焼き写真が封筒に押し込まれていること多いため、まずは一点ずつ確認する作業を行っている。その作業中に手にしたのが、今回展示された高松塚切手の基礎資料である。

## ② 切手類資料から見る高松塚切手の製作過程

2022（令和4）年に、飛鳥資料館から高松塚古墳壁画発見50周年の特別展に当館の高松塚切手の借用依頼があり、今回発見した製作写真について相談したところ、記念すべき特別展<sup>(15)</sup>にこれらの未公開資料が初出品されることとなった【図10・11】。

本章では、出品に供した高松塚切手と切手類資料をとおして製作過程を検証したい。

13 樋畑雪湖『日本郵便切手史論』日本郵券倶楽部、1930年、197頁。

14 前掲、「附録1 通信博物館75年史年表」『通信博物館75年史』383-384頁。

15 展覧会名等前掲。【図10】名称：飛鳥資料館図録第75冊『高松塚古墳壁画発見50周年・奈良文化財研究所70周年 令和4年度秋期特別展「飛鳥美人 高松塚古墳の魅力」』、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 飛鳥資料館、2022年。

## (1) 日本最多の発行部数を誇る切手

高松塚切手は1973（昭和48）年3月26日、3種の寄附金付きの記念切手として発行され、壁画発掘の熱と相まって、一大ブームを巻き起こした。追加発行も含め総部数1億2,050万枚という歴代最多の発行部数の記録は、いまだ破られていない。

人気ぶりを伝えるニュース記事<sup>(16)</sup>によると、発売初日の消印の郵頼が45万通。3月から明日香郵便局局長宅にアルバイト20名を雇い処理にあたったが、それでも追いつかず大阪郵政局にも依頼をしたほど。勝川静子局長の手記によれば、テレビ放映とラジオ、新聞報道により高松塚切手が発売史上空前の人気となり、明日香郵便局では電話は一日中で、「不眠不休の忙殺に追い回された」という。発売日当日は付近の高市小学校の講堂を借りて臨時出張所とし、徹夜組を含め発売時刻の午前8時には600人の行列、ヘリコプターでの報道もあったという白熱ぶりで全国にその熱気が伝えられた。

社会現象ともいえる高松塚切手のブームは、高松塚古墳壁画のイメージを国民に広く定着させるきっかけになったといえるだろう。

## (2) 3種の意匠図案

図案は、高松塚古墳壁画の中から「東壁 青龍」「東壁 男子像」「西壁 女子像」【図12・13・14】の3つが意匠として採用<sup>(17)</sup>され、女子像だけが寸法・版式が異なる仕様となっている。特に女子像は、大型で正方形に近いため、一見すると3種にばらつきがあるように見えるが、縦横比いずれかの長さが共通しており、これにより統一感が生まれている。



【図10】飛鳥資料館図録第75冊『飛鳥美人 高松塚古墳の魅力』、2022年

【図11】特別展の当館切手資料展示（飛鳥資料館）、2022年  
〔撮影場所：奈良文化財研究所。図10、11共に筆者撮影〕



【図12】東壁青龍



【図13】東壁男子像




【図14】西壁女子像




16 「殺到した初日カバー」『郵趣』6月号、日本郵趣出版、1973年、47頁（CDE-0024）、勝川静子「高松塚切手の初日押印事務を終えて」『切手』1058号、財団法人全日本郵便切手普及協会、1973年、3頁（CDE-0023）。

17 「高松塚古墳保存寄附金つき郵便切手の発行について」『報道資料 昭和47～48年』（CGA-0003）、1972（昭和47）年12月8日、郵政省（CGA-0003）。

このような異なる寸法を一式として発行した前例と考えられるのが、1968(昭和43)年の「国宝シリーズ」である。[表3]に示した第1次シリーズの第2弾を例に挙げると、「阿修羅」だけが小型だが、「月光」が「青龍・男子像」、「吉祥天」が「女子像」と同寸であることがわかる。第2次「国宝シリーズ」(1976〔昭和51〕年)以降は、「阿修羅」の寸法はなくなり、「青龍・男子像」「女子像」いずれかの寸法だけが残り、2枚1組の様式が踏襲されることから、この高松塚切手の寸法の組み合わせが、のちの国宝シリーズの基準になったと思われる。

報道資料名	「高松塚古墳保存寄附金つき郵便切手の発行について」、1972(昭和47)年12月8日、郵政省(CGA-0003) ※刷色に関する出典：告示第120号(昭和48年2月17日)『郵政公報 昭和48年(上) 4116~4180』(AMA-0254)		
発行年月日	1973(昭和48)年3月26日		
名称	高松塚古墳保存寄附金つき郵便切手		
料額	20円	20円	50円
付加される寄附金額	5円	5円	10円
意匠	高松塚東壁青龍	高松塚東壁男子像	高松塚西壁女子像
画像			
印面寸法	縦27mm×横48mm	縦48mm×横27mm	縦48mm×横33mm
版式刷色	グラビア5色 灰白、にぶ青緑、赤味黄、 黄色赤、灰黒	グラビア5色 明るい灰、うす青緑、 うす黄茶、赤味だいたい、黒	グラビア3色、階調凹版3色 赤味黄、赤、緑味青、 明るい青、灰黒
シート構成	20枚(縦5枚×横4枚)	20枚(縦4枚×横5枚)	5枚(横5枚)
原画構成者	久野 実	久野 実	渡辺 三郎
発行数	3,000万枚	3,000万枚	1,500万枚
追加発行数	2,010万枚	2,010万枚	530万枚
発行総数	5,010万枚	5,010万枚	2,030万枚

類似する版式、組み合わせの前例

発行名称等	国宝シリーズ「奈良」/1968(昭和43)年2月1日発行		
意匠	奈良県興福寺阿修羅	奈良県東大寺月光仏	奈良県薬師寺吉祥天
画像			
印面寸法	縦11mm×横27mm	縦48mm×横27mm	縦48mm×横33mm

▲ [表3]「高松塚古墳寄附金つき郵便切手」と類似する版式の例「第一次国宝シリーズ(奈良)」

### (3) 高松塚切手の製作経緯

高松塚切手の時代。新切手の意匠の選定については、郵政省郵務局が担当する「デザイン委員会」により前年度に選考が行われたが、当時の写真【図15】が切手類資料(未整理)の写真ファイルから<sup>(18)</sup>複数年分を確認できた。委員会での議論のようすがよくわかる資料である。

高松塚切手に関する資料としては、郵政省の事務用封筒に検討段階の素材写真などが入った



約30種類の写真等一式【図16】を発見することができた。

#### (4) 切手類資料から辿る図案の変化

今回発見した【図16】を整理し、時系列にまとめ、既に分類済みの「下図」や「試刷」「切手」と比較できるよう、【表4】のとおり分類した。

製作段階を伝える資料の比較から浮かび上がるのは、①当初意匠候補として「東壁女子像」も検討された形跡があること。②書体(フォント)の配置、配色に変更があったこと。③色調(カラー)の参考として便利堂の絵はがきが用いられた、という可能性である。

##### ①「東壁女子像」の存在

飛鳥資料館の特別展のタイトルにもあるように「飛鳥美人」の代名詞は、「西壁女子像」の印象が強い。切手図案の製作に際して郵政省に提供された素材写真は、発掘後の石室や各壁面、天井星宿図や海獣葡萄鏡の全12枚である。その中から初期段階に「東壁女子像」を含む4種が候補として検討されていたことが、【表4】D-1、2段階までの写真のほか、D-3のボード貼りの写真から窺い知ることができるだろう。東壁を構成する「青龍」「男子像」「女子像」が揃うことで、三位一体となった切手が、漫画のコマ割りのような動きや流れを生む効果を意図して検討していたのかもしれない。

##### ②書体(フォント)配置、配色が生むバランス

「青龍」「男子像」の書体は、【表4】A、B-3、4、5、6の段階で、意匠名の配色について変更が行われている。「青龍」は、A-3で白文字からA-4で黒文字に変更された。一方「男子像」ではB-5まで白文字だが、最終段階のB-6の試刷で黒文字に変更されている。文字を目立たせるために変更したようにも思うが、「日本郵便」の文字の下にはいずれも同じようなしみがあがり、特に男子像ではしみと黒の書体が重なりやや文字が判別しにくい印象がある。書体の配色を変更した理由は、意匠との配色バランスではないだろうか。男子像の中央には山吹色の衣装を身に着けた人物が配され、黄土色の壁面とともにやわらかな色調の印象があるため、黒にすることで、画中を引き締める効果があるように感じられる。



【図15】「昭和47年デザイン委員会資料」アルバムより、1972年(ネガ・番号未登録)



【図16】郵政省の事務用封筒内「国宝資料 高松塚」、1972年(番号未登録)

18 委員会写真には、郵務局の溝呂木繁局長、同局管理課切手室の礁田寿室長(『郵政省職員録 昭和47年度版』郵政省、1966年、10頁)のほか、外部有識者として渡辺、小倉、三井、宮本、市川の名札を確認することができる。1973年10月6日発行の「国際文通週間」(採用意匠【群鶏図・伊藤若冲】)の意匠を検討していると思われる。上段右から5つ目に若冲の「群鶏図」があり、その他多くの日本画の鶏図が並ぶ。

段階	意匠	A 高松塚東壁青龍	B 高松塚東壁男子像	C 高松塚西壁女子像	D (不採用) 高松塚東壁女子像	E (不採用) その他
1	文化庁提供写真 (便利堂撮影)					東壁「西像」 西壁「男子像」「白虎」「月像」 北壁「玄武」 天井「星宿」 「海獣葡萄鏡」 「石室内写真」
2	文化庁提供写真を 切手室で再撮影したと 考えられる写真					(不採用)
3	書体、レイアウト検討	 意匠名=白文字	 意匠名=白文字	 文字=鉛筆書き(アタリ)	 文字なし。ボード貼り	(不採用)
4	下図案写真 (色、配置) ※カラー下図は現存せず	 20.5	 20.5	 50.0	(不採用)	(不採用)
5	最終決定版下図	 意匠名=黒文字に変更	 意匠名=白文字ママ	 文字入り	(不採用)	(不採用)
6	国立印刷局試刷 ・青龍(1972年12月5日) ・男子(1973年11月5日) ・女子(1973年11月17日) 提出	 青龍のみ3種検討	 意匠名=黒文字に変更	 意匠名=アミカケ(灰)に変更	(不採用)	(不採用)
7	国立印刷局試刷 最終決定版 1973年1月9日提出 齋田切手室長校了印				(不採用)	(不採用)
8	絵はがきセット 「壁画絵画飛鳥高松塚」 (便利堂製 2冊)					左は完了。右は採用壁画3種を切り離した跡がある。
9	絵はがきセットから 何らかの参考とした 切り離した3枚				(不採用)	(不採用)
10	1973年3月26日発行切手				(不採用)	(不採用)

▲ [表4] 高松塚切手「切手類資料」(未整理)との比較

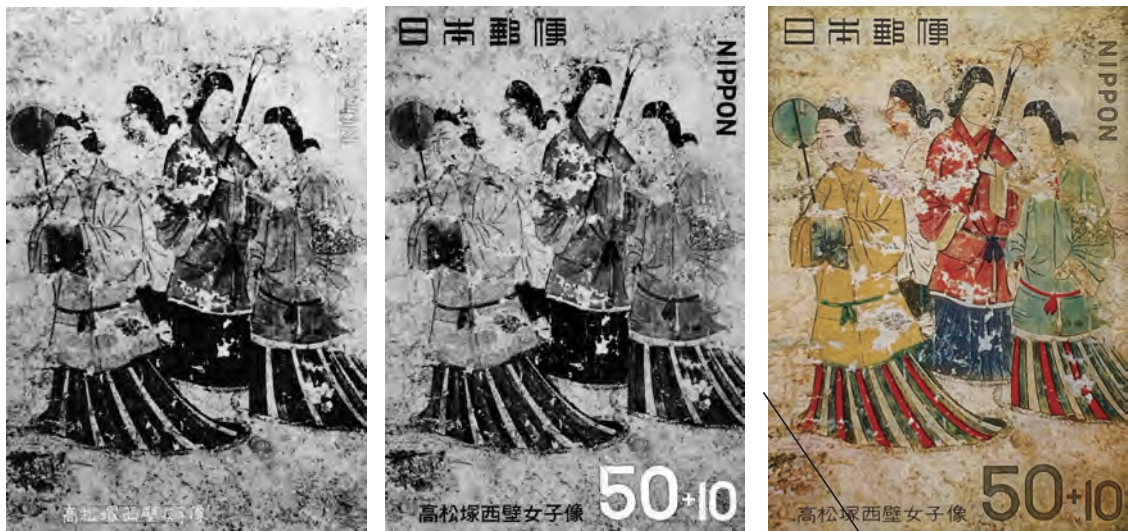
3種の書体の配色は、試行錯誤の結果、「あえて同じにしなかった」ことがわかる。

◆書体配色

- ・「青龍」白黒2色（日本郵便：白、料額：白、NIPPON：黒、意匠名：黒）
- ・「男子像」白黒2色（日本郵便：黒、料額：白、NIPPON：黒、意匠名：黒）
- ・「女子像」灰1色（日本郵便、料額、NIPPON、意匠名：灰色に見える一色）

特に「女子像」については、印刷や寸法など諸条件が異なることを生かして、階調凹版の技術を用いたアミカケで構成されている。遠目には淡い灰色に見えることで、画中の女子像の衣の軽やかさや柔らかな印象を与えている。

階調凹版は、1971（昭和46）年11月1日、「政府印刷事業100年」の記念切手で初めて採用された新技術である。開発を担当した大蔵省印刷局の座談会<sup>(19)</sup>では、この技術は日本画や墨絵のような作品で図案に適しているとされ、翌年度発行の高松塚切手にも採用されたものである。



女子像の製作過程。右から、【図17】検討段階（写真・番号未登録）【図18】下図（5001-229-003）【図19】試刷（5000-229-003）、1972～1973年、[表4]のC-3、5、6に対応。

検討段階の写真などの比較【図17・18・19】から判明したことは、当初の計画では書体はくっきりとした黒で、料額だけ白抜きを予定していた。しかし最終的には、意匠の雰囲気や配色バランスを十分に考慮し、それぞれの作品を生かすための調整を段階的に行ったことが検討資料から見えてくる。

③色調調整の参考品

高松塚古墳壁画、高松塚切手ともに、大きな魅力の一つとして、古代の空気を閉じ込めたままのような、鮮やかな色彩が挙げられるだろう。今回高松塚切手の調査をとおしてより強く印象付けられたのは、高松塚切手の色鮮やかさ。当時の提供写真と比較すると、写真の経年劣化も関係している可能性もあるが、もっと落ち着いた色調である。現在の切手製作でもしみの加工や色調調整などのレタッチが行われる場合があるが、高松塚切手の場合、しみや剥脱部の修正をすることなく映し出している<sup>(20)</sup>。

ただし、色調については調整が行われたようである。高松塚切手と近い配色の例として挙げ

19 「座談会『階調凹版』をめぐって」『郵趣』4月号、日本郵趣出版、1972年、18-19頁（CDE-0023）

られるのが、【図12】に同梱されていた便利堂製の絵はがきセットである。この絵はがきは、実物の壁画に比べて華やかな色彩が特徴的だが、切手もこの色合いを見本に製作された可能性が高い。それを裏付けるものとして、2冊のうち1冊の絵はがき綴りから「東壁 青龍」「東壁 男子像」「西壁 女子像」が切り取られていることが挙げられる。色見本として活用されたのではないだろうか？

そのほかの組み合わせ切手に比べ、高松塚切手は寸法や版型が異なるにもかかわらず、ある種の統一感が印象的である。その効果を果たしているのはやはり配色だろう。

「青龍」「男子像」の若々しい青葉色、「女子像」そして「青龍」「男子像」の赤、そしてやわらかな山吹色、この共通する三色がそれぞれの切手をつなぎ一体感を持たせている。

## おわりに

本稿では、未整理だった高松塚切手の製作資料をとおして、どのような過程が見えてくるのか、検証を試みた。

その結果、高松塚古墳壁画のように実物を題材にした切手は、再現性のみを追求するのではなく、印象をいかに抽出して一葉に集約するかが問われる。料額や国名の配置を配慮し、意匠との配色を検討しながら繰り返し微調整を行っていることが、この一例から確認できた。これは同じく高度な印刷技術で製作される美術書や専門書とは異なる点である。

さらに当館の収蔵履歴を検証した結果、このような基礎資料が常に収集されるものではないことがわかった。一方で意識的に残されているのは、皇室切手、オリンピック切手、新シリーズ切手など、国家的なビッグプロジェクトに関するものである。

当館には切手類資料のほか、用品研究資料なども収蔵しているが、本省移転などの際に相談を受け、歴代学芸員がサルベージしてきたものが多い。現在は、各社にまたがる郵政グループの事業資料の収集・保管は困難ではあるが、「事業の用品研究、切手の改良」を原点とする博物館として、事業資料の調査を着実に積み上げていくことが重要であり、その結果から事業の「クリエイティブ・マインド」を裏付け、未来の商品開発や新しい価値創設の一助につながるよう活動を続けたい。

## 謝辞

高松塚古墳壁画に関するご教示、展示へのご協力を賜り、また本稿執筆のきっかけをいただきました飛鳥資料館学芸室長石橋茂登氏、アソシエイトフェロー濱村美緒氏に心より感謝申し上げます。

(いむら えみ 郵政博物館 主席学芸員)

20 郵政省監修、「高松塚古墳の壁画切手発行」『ぼすとまん』3月号、財団法人郵政弘済会、18頁（BDC-0017）。